

堂山城跡主要部の地形測量調査報告書

平成16年度 国庫補助事業報告書

2005. 3

国分寺町教育委員会



写真1 堂山周辺の航空写真

序

近年、文化財に対する関心は大変高まっています。

郷土に残された文化財を、後世のために大切に保存管理し、次世代に伝承していくことは、現代に生きる私達の使命であります。

国分寺町教育委員会では、昭和58年度から特別史跡讃岐国分寺跡の発掘調査を開始し、平成6年当初の計画した発掘調査を終了し、その結果、僧房跡の保存整備をはじめ、数々の調査成果を見ることが出来ました。

そこで今年度、国分寺町誌編纂に伴い、中世の城跡として高松の勝賀城、綾南の羽床城と並んで、文化財関係者に注目されている、本町内福家地区に位置する堂山に、この地の豪族福家氏によって築かれた堂山城の城郭遺構について、その主要部である堂山北峰の地形測量調査を実施しました。

今後はこの成果をもとに、現状での城跡保存管理を推進するとともに、指定文化財に位置付けることによって、永く後世に伝えていきたいと思っています。

今回の堂山城跡主要部測量調査事業は、国分寺町教育委員会が平成16年度国庫補助事業として、坂出第一高等学校長秋山忠氏の監修のもと実施したものであります。

具体的な地形測量は9月から城郭主要部を含む15000㎡の範囲で行ないました。これによって堂山城の城郭構造が明らかになり、その歴史的な位置付けもより確かなものとなり、今後の城郭研究の一助となれば幸いに思います。

終わりにりましたが、本調査にあたり、地元地権者の皆様及び国分寺山の会の皆様、そして終始専門的立場から御指導、御助言をいただいた秋山先生をはじめ関係者の皆様に心から感謝の意を表するものであります。

平成17年3月

国分寺町教育委員会

教育長 川 上 保 直

例 言

1. 本書は、国分寺町教育委員会が平成16年度国庫補助事業として実施した、堂山城城郭遺構測量調査事業の報告書である。
2. 現地における地形測量は坂出第一高等学校校長秋山忠氏の監修のもと、国分寺町教育委員会が企画立案・計画し、(株)中部コンサルタントに業務委託した。
4. 本書の作成・編集は、秋山氏の指導のもと、国分寺町教育委員会が行った。本書の執筆については第1章・第3章を国分寺町教育委員会が行い、第2章については秋山氏の玉稿を賜った。
5. 調査に際しては以下の方々の協力を得た。
地権者：川西正幸氏ほか48名 久保嘉昭氏ほか36名 吉井安尚氏ほか25名
福本義夫氏ほか43名 中間天満宮
黒川英治氏（国分寺山の会会長）
高松市教育委員会文化振興課

本文目次

第1章 調査の概要

(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査組織	1
(3) 調査区域	2
(4) 調査の方法	2
(5) 調査の経過	2

2章 調査の成果

(1) 福家氏の系譜	4
(2) 福家氏の城構え	4
① 福家館の構え ② 館背後の備え	
(3) 国分寺町域周辺の諸城跡	6
(4) 測量調査にみる堂山城の備えと特徴的な空堀	11
① 堂山城主要部(堂山北峰)の構えと特徴的な空堀 ② 南峰(搦め手方面)の構え	
③ 居館から山城への登はん路 ④ 城構えの増強	
(参考) 「福家根城之圖量」「福家要害城圖量」について	15

3章 城跡の保存・整備

本文中の写真・図目次

写真1 堂山周辺の航空写真(巻頭)	2	図1 福家館跡・福家城跡要図	5
写真2 堂山遠望	2	図2 国分寺町域周辺の諸城跡	6
写真3 GPS観測による登記基準点の設置	2	図3 佐料城跡周辺地籍図	8
写真4 城郭の測量風景	2	図4 勝賀城測量図	9
写真5 現地説明会風景	3	図5 堂山城跡縄張り図	11
写真6 長然寺周辺	4	図6 堂山城跡縄張り図	11
写真7 堀切と掻き上げ土塁	5	図7 堂山城跡縄張り図	11
写真8 佐料城跡の堀跡	8	図8 堂山城跡主要部地形測量図	13
写真9 福家根城之圖量	16	図9 空堀跡周辺の地形測量図	14
写真10 福家要害城圖量	16	図10 堂山城跡要図	15

図版目次

図版1 堂山遠望 長然寺より堂山を望む	18	図版6 空堀跡 空堀跡	23
図版2 長然寺周辺 「隅櫓」上手の堀切と掻き上げ土塁	19	図版7 南斜面より本丸を見上げる 北東尾根筋の堀切地形	24
図版3 堂山山頂の本丸跡 本丸より北東下方の郭群への連絡通路	20	図版8 堂山山頂より国分寺盆地を望む 堂山山頂より高松平野を望む	25
図版4 本丸北斜面の郭 本丸北斜面の郭	21	図版9 福家根城之圖量 福家要害城圖量	26
図版5 本丸の西斜面から見た空堀跡 北西斜面より本丸を見上げる	22	図版10 堂山城跡主要部地形測量図(巻末)	

第1章 調査の概要

(1) 調査に至る経緯

堂山城は国分寺町と高松市の境界に位置する堂山山上に築かれた中世の山城である。城主福家氏は讃岐藤家の流れをくむ豪族で、羽床氏・香西氏とも同族関係にあたる。町域を本拠地とし、現在の長然寺に居館を置いていた。城跡の存在は古くより知られており、また福家氏の末裔にあたる福家ハルミ氏宅には福家氏の系図・由緒書とともに「福家要害城圖量」「福家根城之圖量」（いずれも江戸後期から明治初期にかけて作成）が伝わっている。

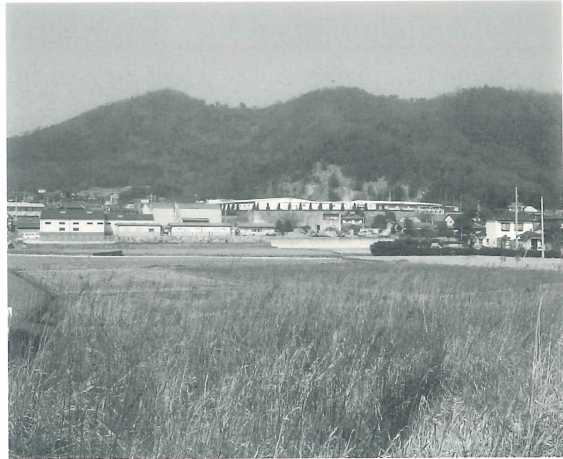


写真2 堂山遠望（西方より、左端が北峰）

これまで、平成9年度より香川県教育委員会が行った中世城館跡詳細分布調査をはじめ、堂山城の踏査による縄張り図の作成が研究者により行われてきたが、方法上縄張り図は作図者の主観による差異が生じ易く、城郭構造の客観的な把握と保存整備への取組には正確な地形測量が必要であった。

国分寺町では平成14年度より『さぬき国分寺町誌』編纂事業を開始、それに伴い平成15年1月、堂山城跡の踏査を行い、執筆委員秋山忠氏（香川県教育センター所長＝当時）により、城郭遺構の確認と縄張り図の作成が行われた。この際、堂山城主要部の規模の大きさやその構造的な特性、遺構の残存状況の報告をうけて、町教育委員会でも正確な地形測量による調査の必要性が検討され、同年度中に将来の測量調査に備えて山頂部に測量基準点（GPS観測による登記基準点6点）の設置を行った。

翌平成15年度に平成16年度文化財国庫補助事業計画を香川県教育委員会を通じて文化庁に提出、平成16年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定を受けて、堂山城跡主要部の地形測量調査を実施することとなった。

一般に中世に関する資料が少ない香川県において、堂山城跡の地形測量図の作成は、堂山城の歴史的な位置づけを的確にするとともに、讃岐の中世史において顕著な動きを見せる香西氏・羽床氏等との政治的な関係や、城郭構築の技術からみた国分寺盆地開発の技術的動向にも迫ることができる手立てとして、その成果が大いに期待される場所である。

(2) 調査組織

調査は、主として以下の体制で行った。

調査委員	秋山 忠	（坂出第一高等学校校長）
調査指導	香川県教育委員会文化行政課	
事務局	川上保直	（国分寺町教育長）
	高笠原昭男	（国分寺町教育委員会教育総務課長）
	末澤直樹	（国分寺町教育委員会教育総務課係長）
	黒田真由美	（国分寺町教育委員会町誌編纂室主査）
	堀 純子	（国分寺町教育委員会町誌編纂室嘱託）

(3) 調査区域

堂山城城郭遺構は、主要部のある北峰山頂から南東方向の鞍部を経て南峰に至る稜線上約500mにわたって、平坦地（郭）および堀切、豎堀の遺構が点在している。今回の調査では、これら一連の堂山城城郭遺構のうち、北峰山頂の主要部と、さらに北東方向に伸びる尾根上の堀切、南東の鞍部より主要部へつながる階段状の平坦地と堀切をふくむ15,000㎡を測量区域とした。

なお、測量区域のうち、およそ半分が高松市域となる。地権者については、国分寺町域側は総数156名の共有林(4筆)であり、高松市域側は中間天満宮(高松市中間町)の宮林である。

(4) 調査の方法

地形測量は㈱中部コンサルタントに業務委託し、平成14年度に設置した登記基準点6点に、さらに4級基準点を設置し、平板測量を行うこととした。平板測量は、スケールを200分の1とし、測量区域を3区に分け、3期の日程で行い、1期ごとに平面図を提出、秋山氏の監修により修正・再測量を行い、また必要に応じて現地にて調整を行うこととした。

なお測量に際して障害となる立木の伐採および下草刈りの作業を香川西部森林組合に業務委託した。ただし、立木の伐採は調査後の遺構保護のため、必要最小限とした。

測量区域は高低差が30mに及ぶ山地であり、基準点測量にあたっては、4級基準点32点を新設した。

平板測量は郭群など平坦地の削平範囲や、空堀や堀切の規模、位置関係などを明確に把握することを主眼にポイントを選定し、行った。



写真3 GPS観測による登記基準点の設置



写真4 城郭の測量風景

(5) 調査の経過

調査に先立ち、平成16年4月28日、事務局が現地にて遺構の範囲確認を行う。6月4日高松市教育委員会と調査についての説明と協議を行う。同月9日に中間天満宮総代に、30日に国分寺町域側の地権者を対象に地元説明会を行い、調査の趣旨等を説明。測量区域での測量・伐開作業についての了解を得る。

6月16日付で国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定通知があり、それを受けて測量および伐開の業務委託先を決定。現地での測量作業は樹木や下草の繁茂期を避けて行うこととなった。

9月15日、調査委員秋山忠氏と事務局、㈱中部コンサルタント・西部森林組合の担当で現地確認を行う。秋山氏より遺構の現状についての説明があり、地形測量および伐開についての留意点等の指示を各遺構の確認を踏まえて行う。その直後から工程に従い伐開を開始。また平成

14年度事業で設けた基準点の確認作業を行い、6点のうち5点を確認。同月30日までに伐開が完了。同日事務局が伐開後の現地の状況を確認。また伐開と平行して4級基準点の設置を行い、32点を設置。

10月4日より第1期平板測量を実施。同月16日までに現地での測量と平面図の作成が完了、18日に秋山氏による平面図の確認と修正箇所の打合せを行う。

10月22日より第2期平板測量を実施。11月2日までに現地での測量と平面図の作成が完了。第2回の測量区域は主要部の約半分にあたるため、秋山氏による平面図の確認等は第3回の測量終了後、主要部全体の測量終了後行うこととする。

同月10日より第3期平板測量を実施。11月23日までに現地での測量と平面図の作成が完了。12月9日、再び秋山氏による平面図の確認と修正箇所についての打合せを行う。

同月17日、修正後の平面図について、再度秋山氏が内容を確認、現地での確認作業を行うにあたっての検討課題について、(株)中部コンサルタント・事務局と協議。

同月26日、秋山氏と(株)中部コンサルタント・事務局により、現地にて平面図と現地状況の整合性についての確認作業を実施。現地で遺構の状況を観察し、平面図の再修正を行う。あわせて遺構の写真撮影を行う。

平成17年1月15日、再修正後の平面図について、秋山氏による確認作業。平面図の体裁についての最終打合せ。同月20日、(株)中部コンサルタントより完成した平面図の提出があり、31日に事業報告の提出を受ける。

3月6日に現地説明会を実施。町文化財保護委員と地権者をふくむ25名が参加した。



地形測量図をもとに、本丸跡で城郭の全体構造を学習した



空堀跡で、地形測量図を確認した

写真5 現地説明会風景

第2章 調査の成果

(1) 福家氏の系譜

福家氏は、新居藤太夫資光（讃岐藤原氏の祖である綾大夫章隆の四男・新居氏の祖）の二男・資幸に始まる。福家・陶・畑田の領地を分与され、福家（阿野郡新居郷）に居館を構え、福家姓を名乗って藤太夫と号し、勘解由頭にも任じられた。資光の三男が香西左近将監資村（香西氏の祖）であるから、福家・香西両氏は兄弟の血筋。羽床氏も、彼らの伯父・藤太夫重高に始まる近い同族である（「綾氏系図」「福家氏系図」）。

このうち、香西氏が抜きん出て一門を束ね、著しい発展を遂げることになる。福家氏歴代中では、戦国期に福家七郎資頭が香西氏に与して活躍。元亀2（1571）年香西元載による備前児島の賀陽城攻めに城持ちの旗下として出陣し、天正3（1575）年天霧城主香川信景が那珂郡の金倉頭忠（金倉城主・丸亀市金倉町）を攻めた際にも、信景を助けた香西方に羽床・滝宮氏とともに加わり、頭忠追討に功を上げた（『南海治乱記』『南海通記』）。

天正6（1578）年香西佳清（佐料城主・高松市鬼無町）が羽床伊豆守の女を離別したことを契機に、伊豆守が阿野南条・北条2郡を押えて自立しようと試みたことで、香西・羽床の同族対立が生じた。七郎はこの事態に心を痛め両家に働きかけたが、香西側に真意が伝わらず、遂に天正7年3月初め、香西浦の大網（鯛網）見物に誘い出されて、沖合いの船中で不意打ちに遭った。七郎殺害の報は、直ちに船から佐料城に伝えられ、北門近くにあった福家氏の参勤屋敷で七郎の子も殺されてしまった。これに激怒した伊豆守は、早速軍を起こして勝賀西表の平尾に出て香西攻めにとりかかったが、勝賀城の守りは固く、背後からも香西軍の攻撃を受けて退却した。この争いを勝賀西表平尾合戦とか、香西の内輪割れという。これ以後、福家氏の領地は伊豆守の預かるところとなり、一時は四散していた家人200人も旧地に召し返されたという（『南海通記』『讃岐国名勝図会』）。

(2) 福家氏の城構え

福家氏の城構えについて、『讃陽古城記』に「阿野郡南條福家村城跡 山城・里城」とあり、その『翁嫗夜話城蹟拔書』には「阿野郡 福家氏城 在福家村。二所。一ハ在山上、一ハ在村中。」とある。在山上は一朝有事の際の「詰の城」である堂山城を、在村中は常なる居館としての「里城」の構えを指している。

また『全讃史』に「福家城福家村に在り」、『讃岐国名勝図会』に「阿野郡南 長然寺（福家城跡なり）」とあり、国分寺町福家本村の龍華山長然寺が福家氏の居館跡であるとされている。

① 福家館の構え

長然寺が所在する一帯は堂山南西麓の高台地で、前方に東羽間・西羽間の丘陵地を控え、その間に

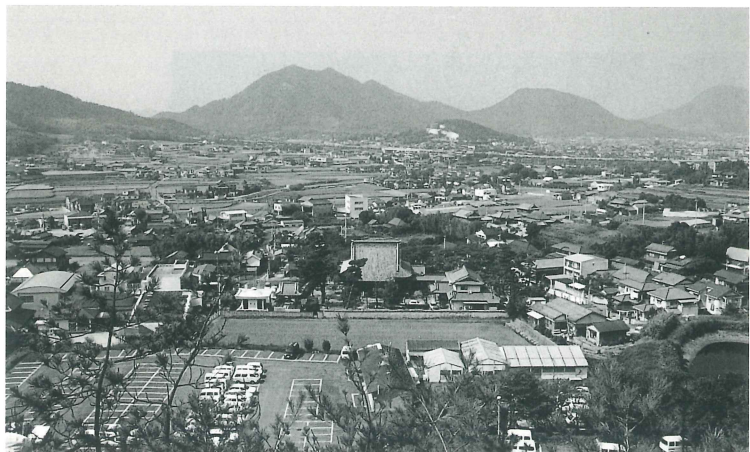


写真6 長然寺周辺（東よりの展望）

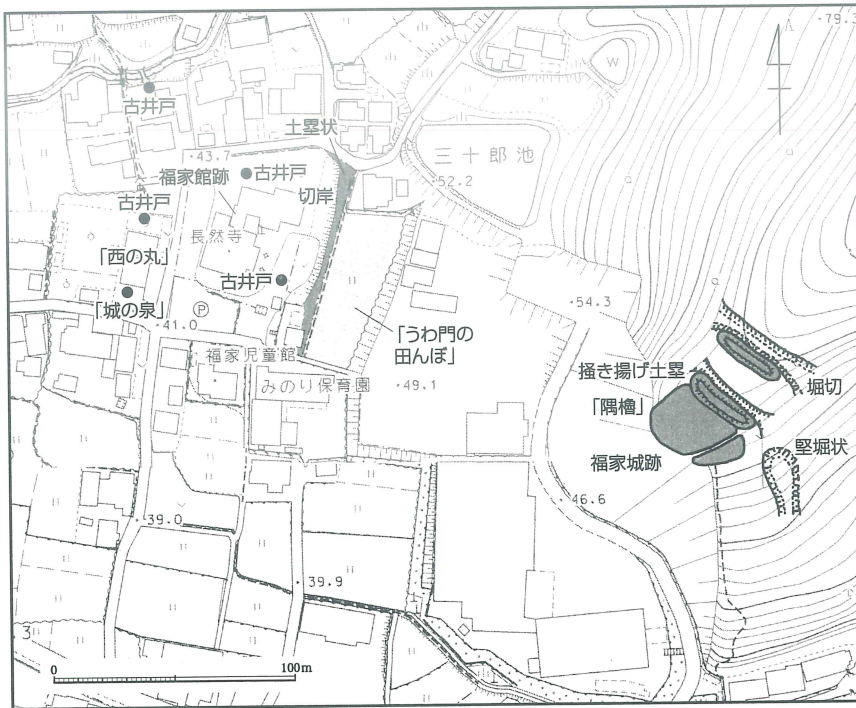


図1
福家館跡・福家城跡要図

本津川が流れる。丁度、南の畑田と北に広がる国分寺盆地を結ぶ通路（現在の琴南・国分寺線）に面した好立地である。寺域は約70aの矩形で、東側が高さ3mほどの切岸となっている。切岸上部は土塁状で土塀が建ち、その外側は1mほど下がった水田地で堀跡を想わせ付近では「うわ門の田んぼ」と呼ばれる。本堂前と裏庭に径70～80cm・割石積みの古井戸が残存し、本堂裏石垣の一部に古手の野面積みが見受けられる。寺北側に用水路・道路が下がるが、ずっと以前は用水路幅も広く、堀跡の様相を呈していたと伝えられる。寺西側の道路を隔てた民家周辺に「西の丸」の称が残り、民家南側の古井戸は「城の泉」と呼ばれていた。民家北側の畑地と更に北側民家裏にも形状等の類似する古井戸が横一線に並んで所在する。「西の丸」南西隅辺の石垣の一部もかつての堀跡に関わるものという。長然寺とその周辺部には断片的に居館跡を偲ばせるものが残っており、寺域は標高42m前後、「西の丸」周辺は40m前後を測り、東西2段の城構えが想定される。山手の三十郎池の堤から望むと、長然寺はまさに居館風である。

② 館背後の備え

長然寺背後の尾根丘陵先端部（標高100～88m）に福家氏墓地がある。墓地南側に腰郭様の平坦地が付く。土砂採取によって丘陵先端部は漸く墓地を残す地形となっており、旧状を知る由もないが、この辺りを指して「隅櫓」と呼んでいた。墓地の直ぐ上手に上幅1～2m、下幅3～4m、高さ2m余の掻き揚げ土塁とそれに伴う堀切が尾根筋を遮断している。その東斜面



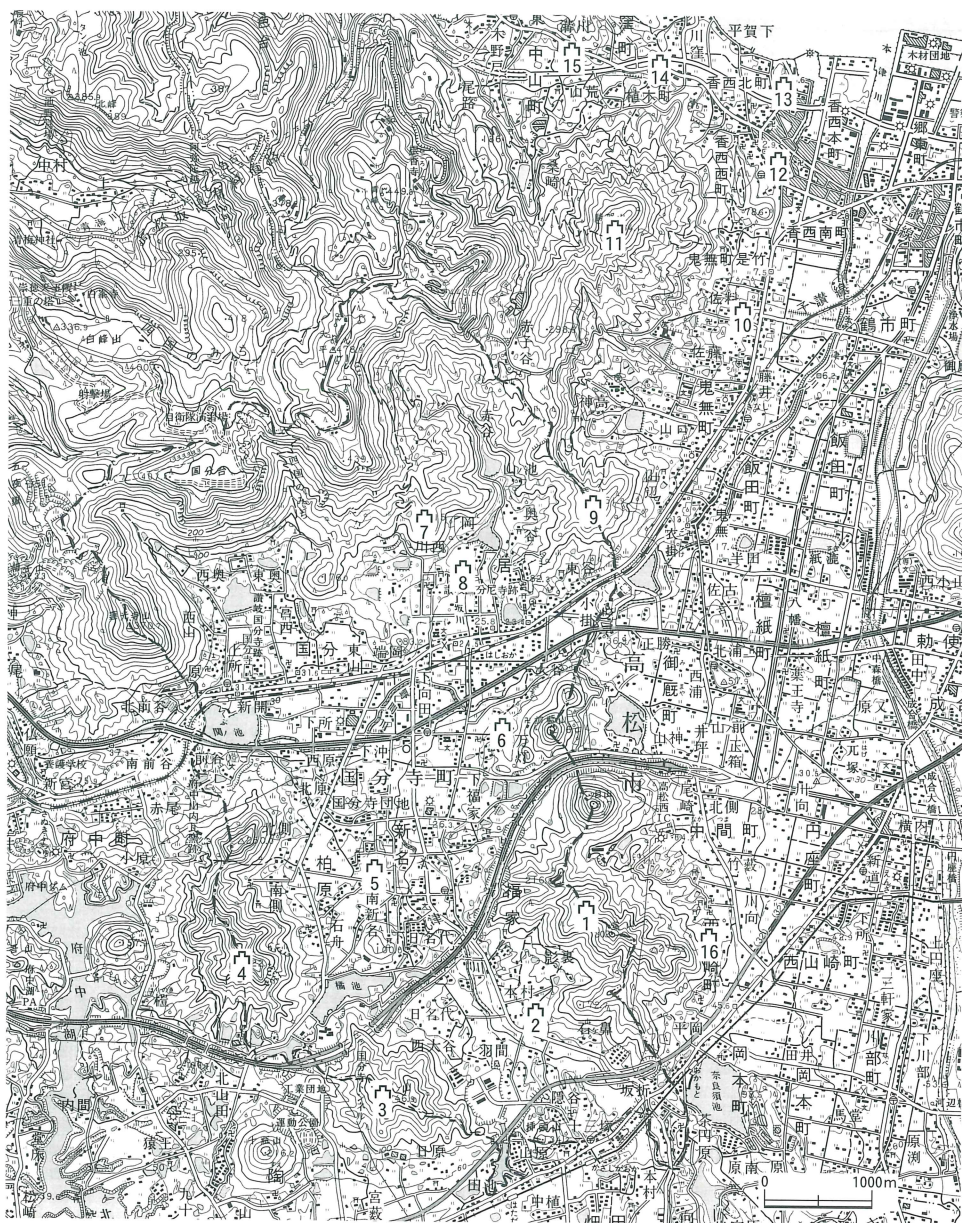
写真7 堀切と掻き揚げ土塁
（北西より、右側が土塁）

には豎堀状の落ち込みが下る。これより緩く登って二重目の土塁とその北東側に堀切地形が残存する。形状等において前者を上回り、頑丈な造作である。堀底から西側斜面を下ると寺裏の三十郎池に至る。ここは有事に備える居館背後の砦跡と位置付けられる。

(3) 国分寺町域周辺の諸城跡

図2「国分寺町域周辺の諸城跡」分布地図の番号に従って、各城跡の概要を述べる。

- 3 火ノ山城跡 国分寺町福家・綾南町陶に跨る標高247mの独立丘陵。頂部北寄りに窪地あり、火ノ山の地名からも狼煙場跡と推測されている。西・南方への見通しが良く、天正期に長宗我部氏の侵攻を福家氏や香西氏に連絡したとの伝承がある。
- 4 鷲ノ山城跡 国分寺町柏原・坂出市府中町・綾南町陶に跨る標高322mの鷲ノ山の南・北2峰山頂部とそれより派生した尾根上に城構え。新名氏の詰の城。最高所の南峰頂部にムスビ形の郭と北側に小郭、南東に緩く下った尾根先端部に矩形の郭と小郭があり、その下方に小堀切がある。北峰頂部は龍神祠を取り囲むように大形の郭があり、北西側に段下がりの小郭が付く。それより少し下って堀切があり、さらに北西に延び



- 1 堂山城跡
- 2 福家館跡
- 3 火ノ山城跡
- 4 鷲ノ山城跡
- 5 新名氏館跡
- 6 末澤城跡
- 7 新居城跡
- 8 新名館跡
- 9 鬼無城跡
- 10 佐料城跡
- 11 勝賀城跡
- 12 藤尾城跡
- 13 芝山城跡
- 14 植松城跡
- 15 中山城跡
- 16 北岡城跡

図2 国分寺町域周辺の諸城跡

る尾根筋に5郭を配している。郭や堀切の在り方から城構えの中心は北峰、北東方が大手。『南海通記』に「此山ハ土高（堂山）、虎丸、鷲ノ峰トシテ國中ニ三ツノ險要也。然レドモ分内狭ウシテ大身ノ要城ニナラズ。新名氏コレニ居ス」とある。

- 5 新名館跡 新名氏は藤原氏日野家の流れをくむ藤原光業に始まる。初め高田姓、南北朝期に北朝に与し戦功があり、国分・柏原・新名の地を得て、中新名に居館を構え、鷲ノ山に築城、新名氏を名乗る。戦国期に新名内膳亮光景が羽床氏に属し、のち長宗我部氏に屈す。今、中新名の舌状台地の中央東寄りに「城屋敷」と呼ばれる一画があり、台地の東・北・西側裾に堀跡を想わせる細長い水田地が巡る。濠下・石橋・蔵元・蔵の前などの屋号や古地名が残る。
- 6 末澤城跡 新居大隅守資秀（新居藤太夫資光の四男）の次男十郎秀親が万灯川の南に居館を構え万灯新居氏を名乗る。14代資忠は応仁の乱で東軍に属し軍功を上げ、末澤姓を賜る。19代資規は長宗我部氏の侵攻に屈し、20代秀継が仙石秀久の旗下として豊後に出陣、のち大坂冬の陣にも出陣。江戸末期の28代文左衛門が元の新居姓に復したという。伽藍山の西麓の万灯集落に一軒のみ新ノ居姓があり、古くから「城」の屋号を持つ。「末澤城由来記」「申伝由来記」「家系図由来書」が伝存する。宅地の西・北側に古手の石垣、北側石垣の上部は土塀台の様相が見られる。
- 7 新居城跡 国分寺町新居東川西の城山（標高216m）山頂部一帯を占める新居氏の詰の城。居館伝承地「土居の宮」から南東山裾まで200mほどの近距離。山頂中ほどの龍神祠と矩形の郭、その南側に2段の小郭と段差の少ない4郭があり、東側斜面に通路様の6小郭が所在する。東・南方面が大手の構え。
- 8 新居館跡 新居氏は讃岐藤原氏の祖・綾大夫章隆の四男資光に始まる。新居郷を本拠に国分・福家・畑田・陶・笠井の周辺諸郷を領す。永禄・元亀の頃に新居大隅守資親が香西伊賀守佳清を助け働く。天正の頃に新居大隅守資虎・資友父子が長宗我部軍の侵攻に備えたが討死。館跡伝承地は「土居の宮」の称がある国分寺町新居中筋の微高地。屋敷神の小祠、微高地の南東隅に堀跡様の細長い水田地などが残る。西方、天童子の畑の傍らに新居氏遠孫が建立した大隅守資虎・資友父子の五輪塔墓がある。
- 9 鬼無城跡 高松市鬼無町・国分寺町に跨る袋山（標高262m）の山頂部に城構え。周囲は急崖地形で、高松平野南部や国分寺盆地への展望が良く、特に後者への物見城砦としての役割が考えられる。山頂に南北に長い郭、南側に4段の小郭が付く。北・東側にも2段ほどの小郭がある。天正10年8月長宗我部軍の鬼無佐料への進軍に対し、思わぬ伏兵として立ち向かい一泡ふかせたのが鬼無城の鬼無兵庫である。笠居郷南部を本拠とした香西氏一族で、鬼兵庫の異名を持つ。香西寺が所蔵する「天正年間香西氏居城古地図」によれば、「鬼無の城」は山城として描かれており、この袋山の城構えを当てることができる。
- 10 佐料城跡 高松市鬼無町佐料の香西氏館跡。初代左近将監資村は讃岐藤原氏の祖・綾大夫章隆の血を引き、承久の乱で鎌倉幕府北条氏に従い軍功を上げ、笠居郷を本拠に阿野（北条・南条）、香川（香西・香東）の4郡に勢力を広げ、勝賀山に要城（詰の城）を築き、東麓佐料に日常の居館（館城的な構造か、里城）を構えた。讃岐の綾氏の出であるから、国の名と氏の姓を結んで讃綾となり、讃綾の館とも呼ばれる。天正5（1577）年18代佳清が藤尾城へ移り住むまで、代々この城に拠った。2代

忠資・3代資茂の頃は次第に内海支配を強め、香西浦の海防強化に努めた。7代親茂以降は讃岐の北朝勢力に属し、管領細川氏との関係を深め、13代元資は管領細川勝元の信任厚く、香川・奈良・安富氏とともに細川四天王と称される。元資の長男元直は勇名高く、常に京都に在って「上香西」の系譜を成し、次男元綱が讃岐香西氏を継ぎ、「下香西」を称す。15代元定は当時強盛を誇る周防の大内氏の旗下に入り、朝鮮・東シナ海に雄飛し財力を蓄え、香西氏全盛期を現出。16代元成が硬軟両様の政治力を発揮するも、18代佳清に至り、一族の内紛、同族羽床氏との抗争、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻により、香西氏の系譜は悲劇的に幕を閉じる。

佐料公会堂の北側一帯が城跡。やや高まる畑地の一角にL字状の堀跡（幅4～5m）が残り、周辺の細長い地形や地名にも城跡の名残がある。堀跡を「内堀」、辺りを「城

図3 佐料城跡周辺地籍図
（「勝賀城跡I」より）

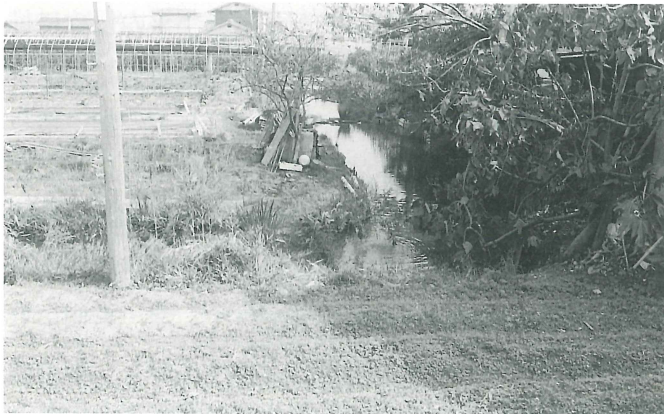


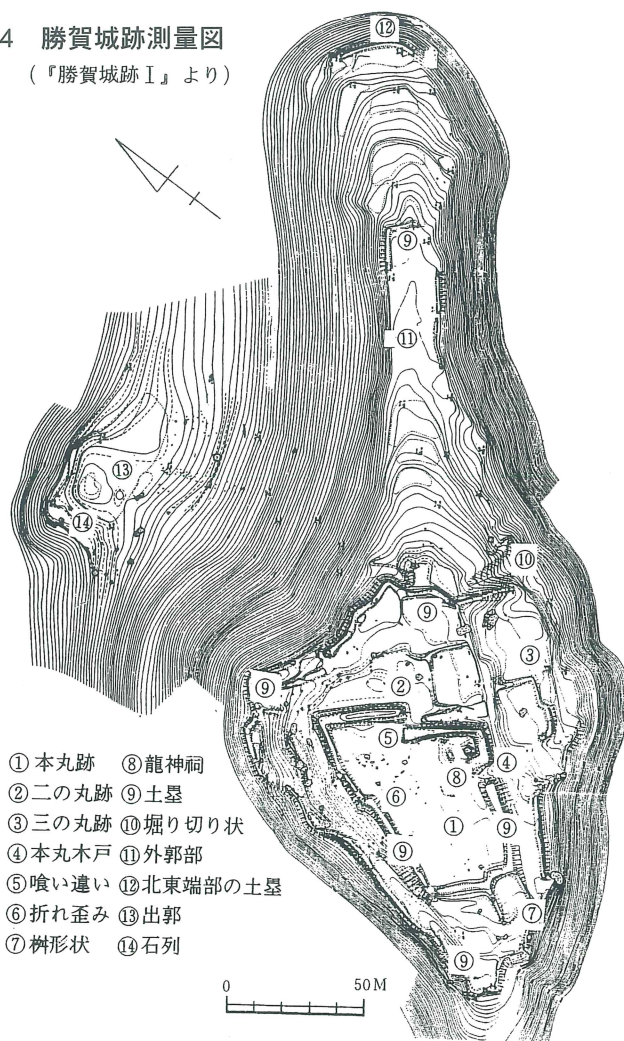
写真8 佐料城跡の堀跡

の内」、その北西隅の民家の屋号が「北堀」で、堀がそこまで延び、すぐ北側の谷川から導水していたのだろう。「城の内」の南側はやや低下した地形だが、前面を押さえる一区画であると想定できる。そこで、「城の内」の主要郭とその前面の郭が付属する複郭式複郭式の館城跡の様子を想像することができる。普通、単郭の方形館から複郭式の方形館・館城への移行期は鎌倉末～室町前半期にかけてとされており、佐料城跡の縄張りが示す年代もほぼその時期に該当するものと考えられる。勿論、幾度かの改変・増強が図られたことを考慮しなければならない。なお、付近に城跡に関係する屋号や地名が多く、御屋敷・城の本家・城の新家・城の台・馬場の谷・東門・泉保池などが挙げられる。「城の内」の南東隅に、『南海治乱記』『南海通記』の著者として知られる香西成資が父・植松吉兵衛時蔭の供養のために建立した墓碑（慶安2・1649年）がある。

- 1 1 勝賀城跡 高松市鬼無町・香西西町・中山町に跨る勝賀山（標高364m）の山頂部一帯を占める香西氏の要城跡。『南海治乱記』に、香西氏の「要城ハ勝賀ノ山也」とあり、『香西記』は「香西氏代々要城也」「此山峰、香西氏数世要城の墟也、天正中城楼敗績して、搔上たる土手のみ残りて荒けり」と記す。香西氏全盛期には、本拠の笠居郷周辺の要所十数カ所に一族・重臣の城館を構え、領内にも部将が守る40余りの出城が存在したと伝えられているので、まさに勝賀城はそれらを束ねる本城である。

勝賀山は、中腹（標高200m）辺りから次第に急坂・急崖の地形となり屋根形（台地状）の山頂に至る。城の主要部（内郭）は南寄りにあり、その中心は堅固な土塁に囲まれた矩形の本丸。南北60m、東西30～40mの城内最大の平場で、東南部に木戸口（大手門）が開かれている。木戸口両側の土塁は下段の郭からゆうに見上げる高さを持つ。本丸北辺の中央で喰い違ひ土塁も頑丈である。本丸周辺の土塁には、接続部で高低差をつけたり、折れ歪みや榊形状に巡るものを設けるなど、防備上の効果が図られている。また、要所に石塁を基部に据えた腰巻石垣を採り入れ、盛り土も版築工法によるつき固めを施している。本丸の北側、喰い違ひの虎口（木戸）を通じる一画が二の丸郭、それより一段下がった東側の郭が三の丸に当たる。本丸・二の丸・三の丸が相互に隣接し寄りかかった梯郭式の縄張りであり、この内郭をさらに外縁を巡る土塁が取り囲む。この土塁を石垣に置き換えれば、れっきとした近世城郭に様変わりするほど、特徴的な土塁の城である。内郭から堀切状の地形を経て北東に延びる尾根上にも、外郭部の幾つかの郭が並ぶ。その先端部の郭の前面には、盛り土の流出があると見られるが、土塁を構築してより防備を強化する手立てがとられている。なお、内郭の北西下の山腹に（標高320m前後）隠し砦のような出郭がある。緩い斜面を利用した所で、北方海上への備えなのか。

図4 勝賀城跡測量図
（『勝賀城跡I』より）



- ① 本丸跡 ⑧ 龍神祠
- ② 二の丸跡 ⑨ 土塁
- ③ 三の丸跡 ⑩ 堀り切り状
- ④ 本丸木戸 ⑪ 外郭部
- ⑤ 喰い違ひ ⑫ 北東端部の土塁
- ⑥ 折れ歪み ⑬ 出郭
- ⑦ 榊形状 ⑭ 石列

堀切状の地形を経て北東に延びる尾根上にも、外郭部の幾つかの郭が並ぶ。その先端部の郭の前面には、盛り土の流出があると見られるが、土塁を構築してより防備を強化する手立てがとられている。なお、内郭の北西下の山腹に（標高320m前後）隠し砦のような出郭がある。緩い斜面を利用した所で、北方海上への備えなのか。

城構えは、本丸に東面して大手、南面して搦め手の位置をとる。高松平野を眼下に収め、北方に広がる内海への展望が良い。中讃4郡を押え、海上に発展した香西氏の本城にふさわしい地取りであり、しかも実戦的で巧妙、堅固な縄張りが注目される。全体に戦国期終盤の様相を呈している。各部所とも殆ど後世の損壊を受けておらず、勝賀城跡こそ当時の縄張りや構築の状況を一貫して知り得る中世山城の好例である。

1.2 藤尾城跡 高松市香西本町、宇佐神社が所在する藤尾山（標高20mの独立丘陵）が香西氏終幕の舞台である城跡。その小高い鎮守の森を中心にして香西の町並みが広がり、昔から「向き向き」（鍵形に折れた路地や袋小路など）の町と呼ばれてきた。藤尾城の城下として町づくりが行われた名残である。18代香西佳清は、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻という戦雲急を告げる状況を背景に、累代の居城・佐山城が平地で防備が手薄であることを考慮して藤尾山に築城を計画し、天正5（1577）年

完成を待たずして佐料より移り住んだ。藤尾山に本丸、山の南東側に天神郭、北東側に堀の内郭、北西側に北の丸郭、南側に五反地郭を配し、周囲に水堀を巡らした縄張りであった。辺りは深田湿地の要害地形で、城下の集落も要塞化を図り、周辺の諸城を取り込んで防備態勢を強化するなど、所堅固の「総構え」的な様相を展開していた。明治6～8年頃の香西地引図を見ると、山を中心に不整な五角形状の区画が強調されており、この区域が城郭の主要部に該当すると考えられる。

旧地に戻った宇佐神社の社殿が建つ所は、改築時に相当手を入れたと思われるが、43×39mほどの広さを有し、本丸にふさわしい。北側斜面に3段の細長い削平地、西側に帯状の削平地が巡って、その下方に55×42mの最も広い削平地がある。これが旧状を保つとすれば二の丸としての扱いができる。

- 1 3 芝山城跡 高松市香西北町芝山（標高44mの独立丘陵）にある香西水軍の出城跡。香西浦は香川郡の津として古くからの良港であり、これを扼する芝山への城構えは香西氏2代忠資による海防のための出城が始まりであるという。以後、香西氏は水軍を強化し、内海支配を強め、芝山城は玄関先の備えとなり、戦国期には家臣渡辺氏がこれを守る。岬のように突き出た芝山の東斜面が急崖状、西斜面は比較的緩い地形である。頂部の芝山神社周辺の細長い平坦地が南の丸、北へ下った方形平坦地が本丸、山の北端にある展望所との間に北の丸の平坦地が存在したとされるが、現在は果樹園となり確認できない。本丸跡は削平加工の度合いが良く、東側縁辺には低い土塁跡が残る。頂部から北面にかけて段下りの3郭を配し、格別の施設を施さず単純である。この山の立地の良さだけで、城構えの目的を満たしているのだろうか。
- 1 4 植松城跡 高松市香西北町平賀下、住吉川南の段丘状水田地に「大屋敷」の称が残り、その北端部はさぬき浜街道によって削り取られたが、かつては北側から西側にかけて2～4mの切岸で、北側低地には「殿前」の呼び名がある。城構えは、下香西家の祖・元綱の孫資正（植松備後守）に始まる植松氏による。資正の本邸は香西宮の下にあったので、植松城は言わば下屋敷となるが、植松村に因んで植松姓を名乗る。『讃州府志』『香西記』によれば、「大屋敷」は植松彦大夫（資正の五男往由）の城跡で、その隣地が植松備後守の別業地（別荘）であり、二つの屋敷が並立していたように記載されているが、近辺に植松備後守の本家筋にふさわしい、「大屋敷」以上の屋敷跡らしきものは見当たらない。
- 1 5 中山城跡 高松市中山町に「中屋敷」の地名が残る一画がある。堀跡を想定していた北側の長池が埋め立てられ、姿を消した現在、城館跡のイメージはつかみ難い。長池は東西の長さ180mほど、幅5～18mで、西から東へと次第に広がっていた。南側の岸面には粗放な石積みが見られた。中山城は内間城（香西南町本津、13代香西元資の築城）の属城とされ、内間城が香西の東の守り、中山城が西の守りの役割を担い一族の部将が詰めたようである。
- 1 6 北岡城跡 高松市西山崎町上所、堂山東麓の小丘先端部に末裔の建立した北岡城主久利長門守碑がある。秦久利一族の来歴が刻まれているが、久利は朝鮮渡来氏族である讃岐の秦氏の子孫で、讃岐守であった菅原道真とも親交があり、早くから香川郡一帯に勢力を根付かせている。ずっと降って、戦国期に久利長門守がおり、遠祖以来の中間郷のうち中間・山崎・岡本辺りを領して羽床氏や香西氏に属した。「シロ

アト」の碑の傍らに崩れた五輪塔石と先祖供養の石塔が見られ、すぐ南・東側にある2～3段の削平地は開墾等に伴うものか。現状では、丘城の構えは見当たらないが、この丘の立地は誠に良い。背後は堂山の山並みに限られ、前面に高松平野の広がりがある。東方に上佐山が、北方に勝賀山から香西浦の内海が遠望できる。南方は、岡本を経て阿野南条へ通じている。

(4) 測量調査にみる堂山城の構えと特徴的な空堀

讃岐の中世山城を概観すると、(ア) 標高200～400mの山頂部に立地し、中でも300～360m前後に位置するものが「詰の城」としての機能に適しているようである。(イ) 要害の山地形を利用した連郭式の縄張りを呈するものが多いが、戦国期後半に入り守備固めが強化され、縄張りが複雑化している。(ウ) 戦国期後半の領域支配の拠点城郭として、その縄張りの特徴や規模、支城網の形成等において抜きん出ているのが東讃を代表する安富氏の雨滝城や香西氏の勝賀城であり、西讃を代表する香川氏の天霧城である。特に、勝賀城は城郭主要部を腰巻石垣による二～三重の土塁で囲み、集約的な郭の配置で防御を固めている。また、天霧城は山頂一帯の段差をつけた郭群を遮断する空堀を配置して守備の効率を高め、山頂部から広範囲に派生する各尾根筋にも階段状の郭群を造成し、外郭線の守りが広い。どうやら讃岐の中世山城は、この勝賀城型(集約型)と天霧城型(拡散型)に分か

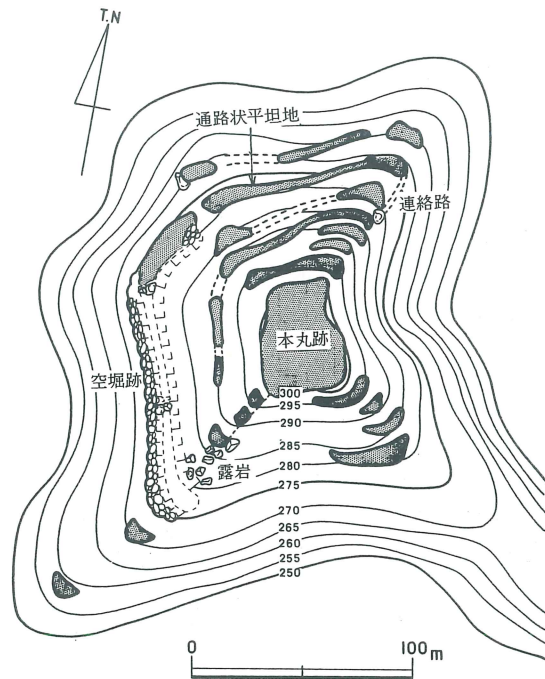


図5 堂山城跡縄張り図 秋山忠作図
『古城跡を訪ねて』(1982)より



図6 堂山城跡縄張り図 池田誠作図
『図説中世城郭事典』(1982)より

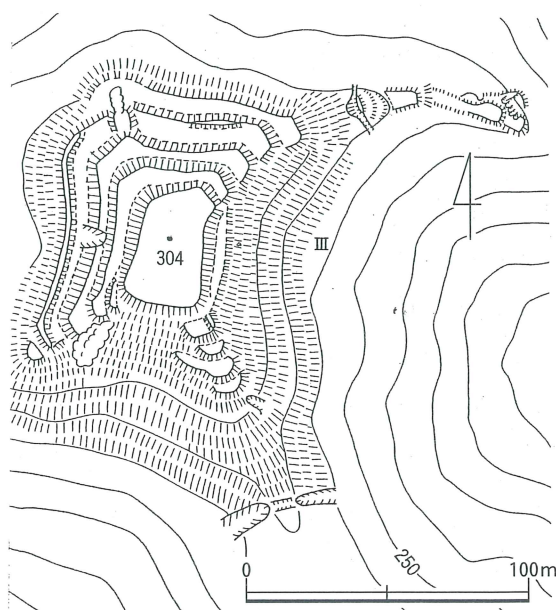


図7 堂山城跡縄張り図 東信男作図
『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』(2003)より

れそうである。

国分寺町域は、かつては讃岐の東・西勢力の境目地帯に当たり、その政治的な必要性から諸豪族により幾つかの中世城郭が築かれた。中でも、城郭構造の特徴や残存状況等から注目されてきたのが堂山城跡である。

従来、堂山城跡の概況については、踏査による縄張り図の作成や部分的な写真撮影等を通じて把握され、公表されてきた。一般に、縄張り図は調査者が地形図をもとに地表観察や略測によって図化（ケバ表現）していくものであり、埋没或いは流出・消滅した遺構による地表の微妙な変化を見極める調査者の経験と判断に負うところが大きい。調査者の城郭構造を十分理解した観察力や表現力など、その力量によって自ずと作成される縄張り図に差異が生じることになる。堂山城跡主要部を捉えた、左ページの縄張り図（作成の時期にかなり隔たりがある）は、いずれも城郭の全体的な状況とか、雰囲気などを伝えているものの、現地表に残る城郭構造の正確な表現と位置付けになっているかどうか、城郭の機能を理解することのできる作図になっているか、などという課題がある。また、部分的な写真撮影では遠近感に乏しく、山林等の現況では城郭遺構を満足に捉えること自体が困難である。

こうしたことを踏まえ、『さぬき国分寺町誌』編纂事業を契機として、町当局は、後世の損壊が殆ど見受けられない堂山城跡について、その主要部である堂山北峰（標高304m）の地形測量調査を実施し、城郭遺構の正測量図を得て、できるだけ現状での城跡保存管理を推進するとともに、指定文化財として位置づけることなど永く後世に伝えていく手立てを採ろうとしている。

地形測量図面を作成する上で、自然地形と遺構をどのように区別して表現するか、また遺構の範囲や微妙な変化をどのように等高線によって描くかなどが当面の課題であった。調査期間中、測量技術者と現地踏査で、さらに作成途中の測量図面を前にして、城郭構造や遺構の在り方を確認したり、地形の読み取り方等について調整を図った。幸い、作成された測量図面では等高線の入り方や在り様だけで、従来描かれてきた縄張り図の全体的な城郭構造がきちんと表現されているので、等高線の読み取りが可能なように城郭部分には薄いスクリーンをかけて自然地形と区別した。

① 堂山城主要部（堂山北峰）の構えと特徴的な空掘

伽藍山から六ツ目山・堂山への南北に連なる山並みが高松平野と国分寺盆地を限り、それらの稜線部に高松市と国分寺町を区分する境界線が走る。南の堂山は、複雑な尾根筋が数多く派出し、北西から南東に向けての稜線部に四つの峰があり、中ほどの2峰が一際高まる。その北峰の山頂部（標高304m）が城構えの中心であり、南東の鞍部を経て高まる南峰（標高302m）とそれに続く尾根筋にも幾つかの郭群が配置され、城域が広い。

北峰の頂部は20×30mほどの、やや南北に長い平坦地で四方への眺望の利を得ているが、削平は不十分である。その東側に北東下方の郭群に連絡する幅広の通路が付く。この主郭に寄りかかる郭の配置は北側に厚い。通路様の箇所を設けた帯郭が都合6段、相互の連絡が行き届き、主郭をよく防備する体勢である。南東側には4段の小郭があつて、南峰との鞍部にいたる傾斜変換地点に取り付きの小郭と尾根筋を遮断する堀切状の地形が見られる。その小郭の形状から推して、この辺りが土橋状になるのかもしれない。また東側の堀切地形に比して、西側は不明瞭な斜面である。一方、南西側の足掛りのような3段の小郭を下ったところが空堀の南端部である。空堀は、頂部から13mほど下方の西側山腹を幅4～6m、深さ0.7～1.2m、長さ70mにも

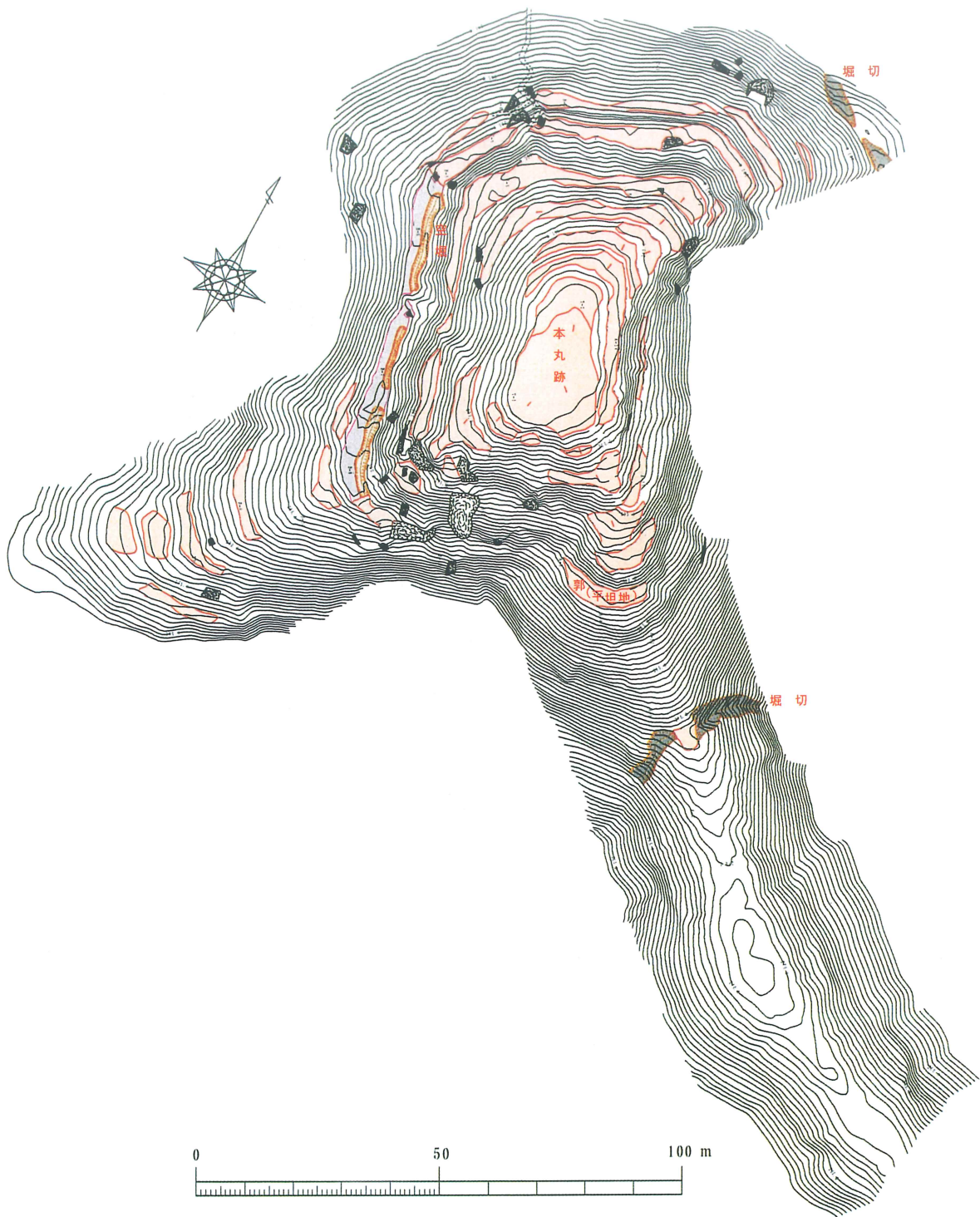


图8 堂山城跡主要部地形測量図

わたって掘り下げたもの。掻き揚げた碎石を斜面下方側の側端に積んで石塁状にし、下方との比高差と堀の深さを大きくしている。そのうえ、空堀を造り出すことによって、頂部側の斜面は5～7mの切岸状崖面となっており、言わば二重の備えとなっている。空堀の中ほどに仕切りの土堤が設けられているのは、敵の侵入時を想定して、敢えて通行の障壁を造ったものなのか、また通常は城内の通路として利用し、有事の際は排除するものなのか、などが考えられる。なお、空堀下方の尾根筋にも不整形な5段の郭が配されている。それにしても、これだけの空堀を山頂部斜面に造り出していることは、この山城の大きな特徴であり、県内には他に例を見ない。この空堀の在り方や集約的な郭群の配置状況から見て、北・西側が大手、南東側が搦め手の位置関係を占めるものと考えられる。

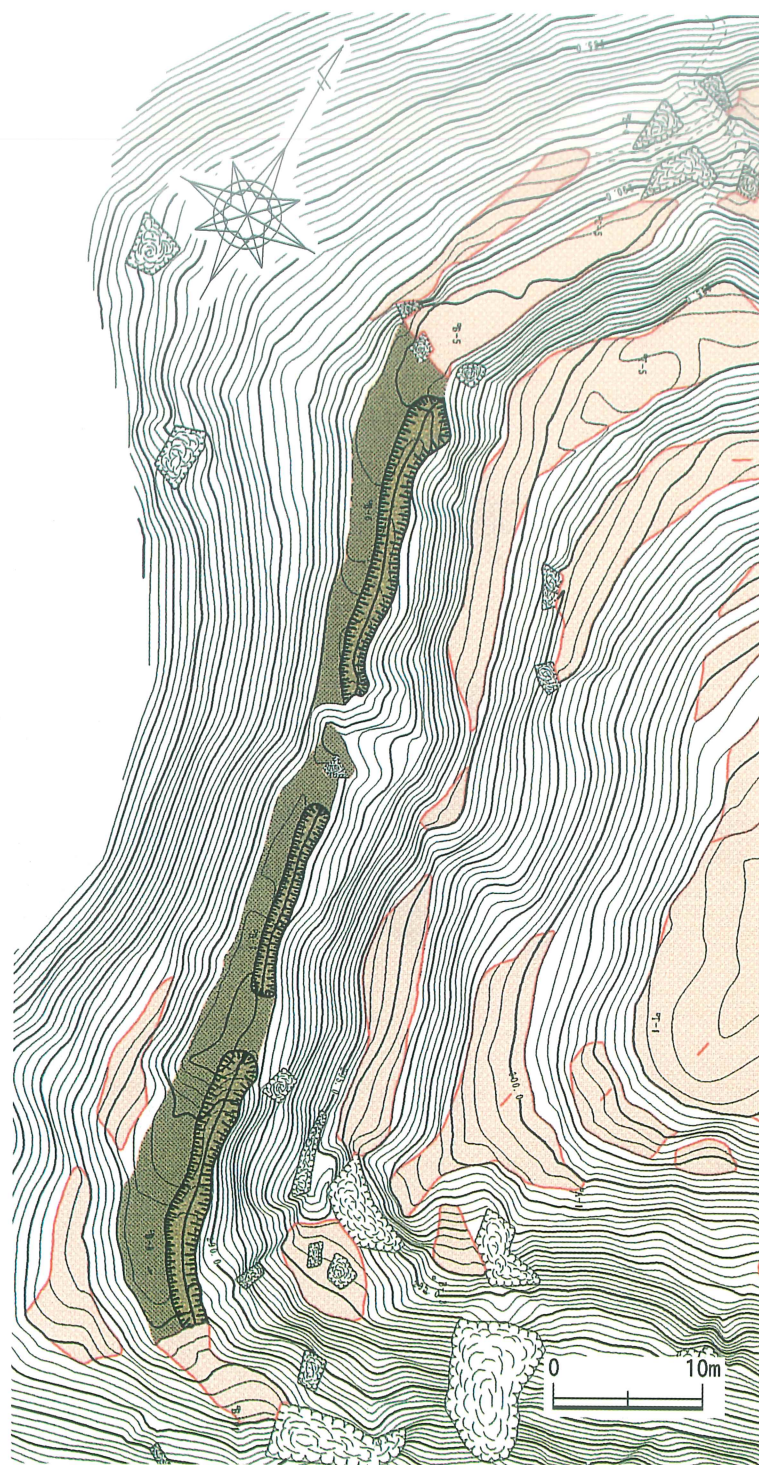


図9 空堀跡周辺の地形測量図

② 南峰（搦め手方面）の構え

踏査による縄張り図により搦め手方面の郭群を辿る。南峰への鞍部に足溜まりの2郭があり、南峰頂部は鉄塔建設により一部地形の改変があるものの、14×12mほどの主郭と3段の郭が南東側に連なり、北側にも一つの小郭が付く。これを下りた所は南北からの堀切地形となり、緩く登って南東側の小峰に至る。頂部の地形に合わせて3段ほどの小郭が連なり、その両側に豎堀状の地形が見られる。さらに南東へ緩く下った所に2郭がある。総じて、南峰周辺は散在的な小郭群と堀切、豎堀による構成で、北峰の集約的な構えと趣きを異にするのは、搦め手方面の防備ということにもよるが、城構えの増強の時期差を示していると思われる。

国分寺盆地の南口を押さえる福家館とその背後の備えを有した福家氏にとって、堂山城はまさしく牙城、「詰の城」であった。築城の時期は明らかではないが、その縄張りの状況は戦国期の

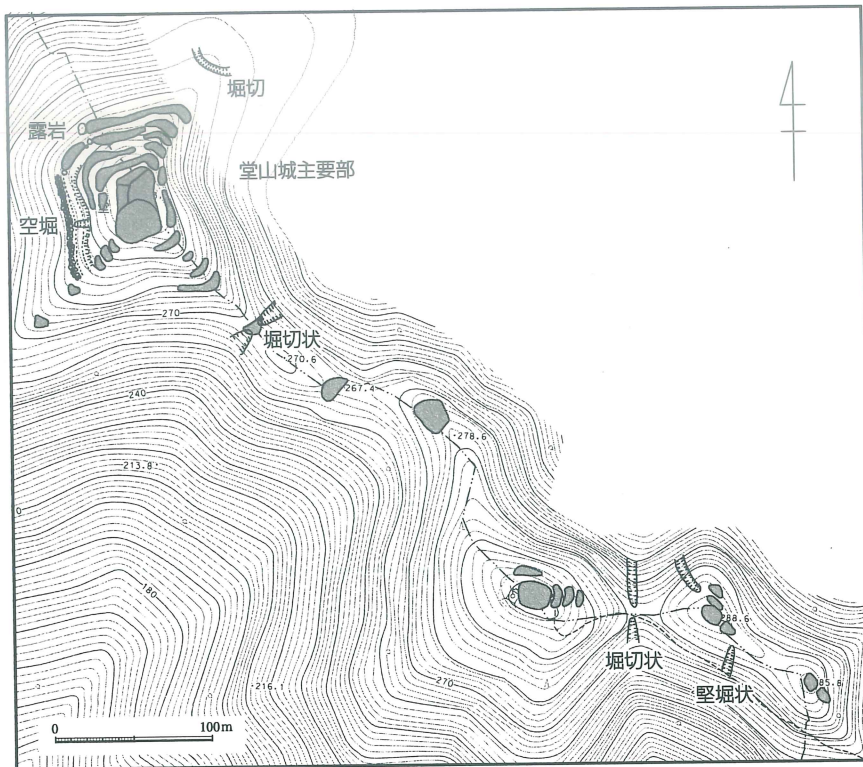


図 10
堂山城跡要図

様相を呈している。

③ 居館から山城への登はん路

居館跡とされる長然寺近辺から堂山城への登はん路については、現在の登はん路も踏まえて、福家本村から影裏を経て山頂南面の谷を北上する直線的なコースが妥当であると考えられるが、その南麓の北谷集落から谷あいを登って山頂西面に至る順路も想定される。上福家の日抱神社後方の尾根筋を辿る順路や、随分と遠距離になる、長然寺背後の尾根（館背後の砦跡が所在）から稜線部を北西に迂回しながら南峰の構えに取り付くコースなどは往時の登はん路として、どうであろうか。

④ 城構えの増強

城構えは、敵対勢力の動向を最大限に考慮してなされるのが常識である。堂山城から西方足下に国分寺盆地を見下ろすのは良いとしても、北方に高松平野の西辺となる御厩・鬼無・香西方面を睥睨するのは如何であろうか。その一帯は、主家であり、同族でもある香西氏の本拠地である。天正7（1579）年3月福家七郎資頭父子が香西佳清に謀殺されて以後、一門は香西氏と対立する羽床氏の預かりとなっている。堂山城も羽床氏の勢力下に置かれ、同年11月羽床氏が土佐・長宗我部氏の侵攻に和議をもって降ると、それ以降の香西氏攻略や東讃侵攻のために城構えの増強が図られたものと考えられる。

（参考）「福家根城之圖量」「福家要害城圖量」について

町誌編纂に向けて、福家氏の末裔とされる福家ハルミ氏（国分寺町福家本村）から「福家根城之圖量」「福家要害城圖量」のほか、「藤性（姓）福家氏系図」上・下、「藤家拾遺秘録」、「由緒書」等の所蔵史資料を提供して頂いた。両圖量は、図中の柵列・木戸・石垣・井戸・建物配置線引きなどの表現や彩色が酷似しており、同一筆者によるものと考えられる。いつ、誰がどのような

手立てで作成したのか、詳らかでないが、福家氏関係城郭に強い関心を寄せ、ある程度の、城郭の縄張りに関する知識や絵心を持ち合わせた人物の手になるものと想われる。「山内村誌」巻五第一節城砦趾の「福家城」「山要害城」の末尾に、それぞれ福家根城圖書・福家要害城圖書参照と記され、両圖量作成の経緯については触れていないが、全体の描法とか、料紙や彩色・表装の状況など表具上の観点から明治前後の作成と推定される。

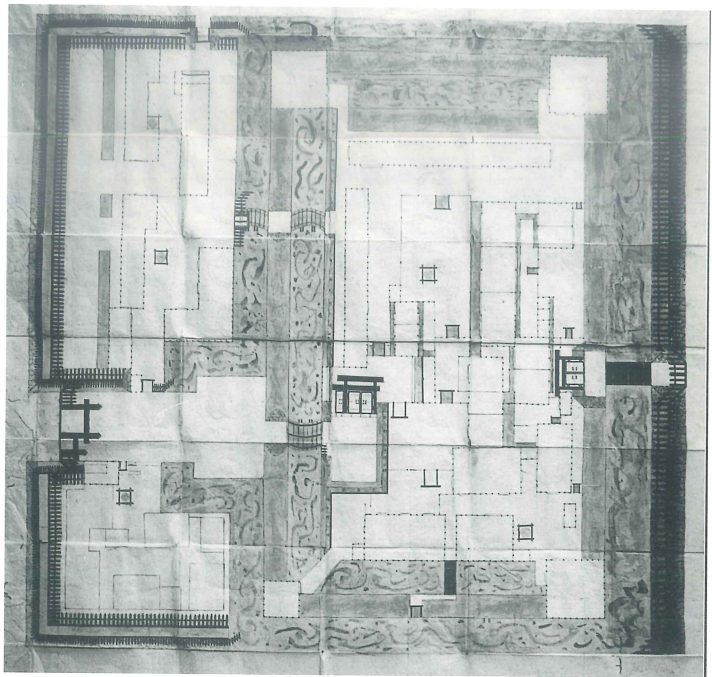


写真9 「福家根城之圖量」(上が北)

「福家根城之圖量」に描かれた縄張り等について見る。東・西矩形の2郭連結による縄張りで、建物・隅櫓・冠

木門の配置など複雑な構成をもつ東側が主郭(本丸跡)と見られ、周囲を柵列・堀・土塁・石垣等で囲む。2郭の連結部は堀と土塁の二重の備えで、2ヵ所に小橋を架け、その南手の小橋から枡形様の構えを経て主郭へ通じる。枡形様の構えとそれに続く南北側の土塀には丸・四角の狭間を備える。西郭は、西側正面に板戸なしの冠木門を設け、それに続く土塁と二重の柵列が郭を囲む。主郭に2ヵ所、西郭に3ヵ所の井戸が記されている。全体に近世城郭を意識し過ぎた描き方である。

「福家要害城圖量」に描かれた縄張り等について見る。描かれた国分台の山並みや山麓の道筋

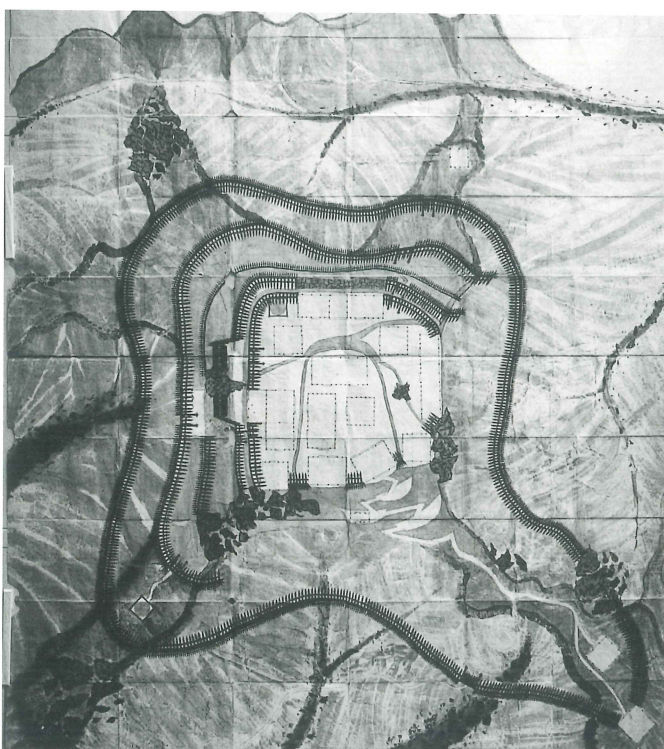


写真10 「福家要害城圖量」(上が北)

などから、図上部が北方を示す。山頂部から短く四方に延びた尾根筋を捉えて、都合5段の柵列が囲む。最下段の柵列が尾根筋を含めて城郭全体を巡る。頂部北側から西側の山腹にかけて2段の柵列に囲まれた施設が他と区分された色調で描かれており、空堀跡を想定することができる。頂部を五区分する土塁様の施設があり、また頂部北西隅と南西尾根の柵列内に井戸が記されている。南西・南東尾根の谷沢を登る小道が南東尾根筋の登はん路と合流している。全体の城構え、柵列の在り方、登はん路の状況などから、北・西側が大手、南東側が搦め手と受け取れる。絵図様の描法であるが、最近の踏査による縄張り図と郭の全体構成が類似していることに留意したい。

第3章 城跡の保存・整備

測量調査終了後の現時点での、城跡の保存・整備に関する基本的な方針等について、以下に要約する。今後は、測量調査の成果に基づき堂山城の城郭構造を明らかにし、他の中世城郭との比較や構築上の技術的な側面などを十分に検討し、堂山城の歴史的な位置づけを確かなものとしていきたい。またそれに伴い、城跡の保存・整備に関してもより詳細で、具体的な方策を検討していくこととする。

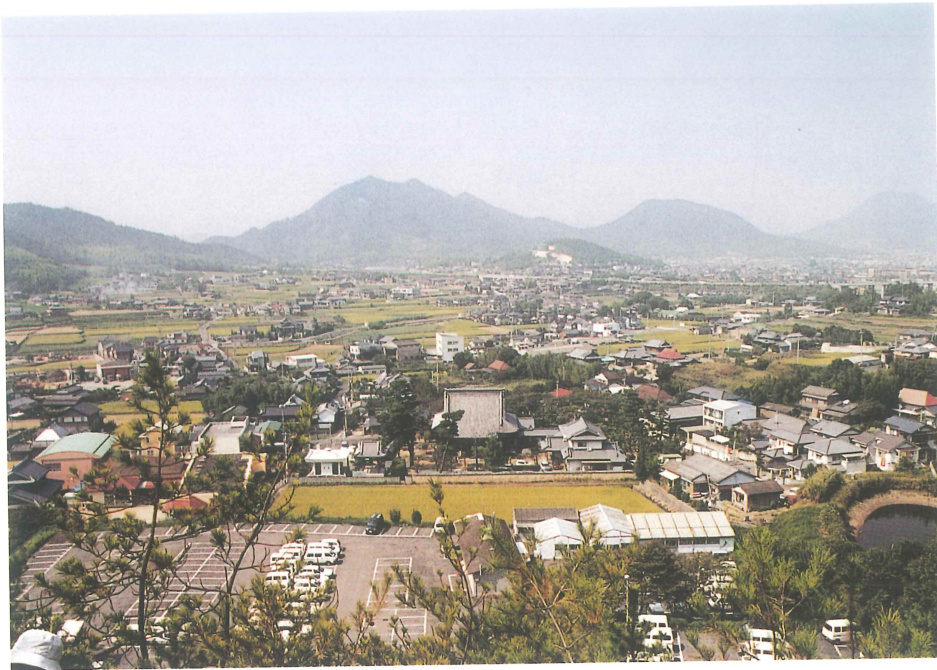
- (1) これまでの堂山城跡に関わる踏査等の所見も含め、今回の測量調査の成果に基づき、堂山北峰の城跡主要部を中心に堂山城跡城郭遺構を国分寺町指定文化財として位置づけ、今後の保存管理に資する。ただし、堂山城跡は高松市域と跨っており、文化財指定に当たっては高松市教育委員会との十分な連絡調整が必要である。
- (2) 堂山城跡は、中世城郭として後世の損壊が殆どなく、よく旧状を留めており、今後もできるだけ現状での保存管理に努めるという基本方針から、城跡の史跡としての価値を損なうような現状変更については、原則として認めない。
- (3) 今回の測量調査に伴い、階段状の郭、空堀、堀切等の遺構部分の伐開を行ったが、樹木の伐採等は降雨時の土砂流出など遺構の損壊につながるため、今後は、城跡保存に理解の深い有志等による下草刈り等の取組にとどめ、現状維持に努める。
- (4) 堂山は、城跡等に興味・関心を持つ愛好家以外にも、一般の登山者が多く訪れる山であり、多数の通行による遺構の損壊も危惧される。これについては、地元関係者への周知や、周辺登山道へ解説や案内表示板の設置など、登山者等への注意を促し啓発に努める。
- (5) 堂山城跡は、高松市と国分寺町の1市1町に跨って広がっており、その地権者については、高松市側が中間天満宮の所有であり、国分寺町側は共有林となっている。このような状況から、開発等に起因する史跡破壊のおそれは少ないと考えられるため、公有地化は行わない。
- (6) 史跡の保存管理、活用については地権者および地元関係者の理解と協力は欠かせない。一般に中世史および中世城館跡等への関心と理解は比較的希薄だと考えられるので、今後とも各位の理解と協力を得て史跡の保存管理と活用に努める。



堂山遠望（西より、左端が北峰）



長然寺より堂山を望む



長然寺周辺（東よりの展望）



「隅櫓」上手の堀切と掻き上げ土塁（北西より、右側が土塁）



堂山山頂の本丸跡（南より）



本丸より北東下方の郭群への連絡通路（南より）



本丸北斜面の郭（東より）



本丸北斜面の郭（東より）



本丸の西斜面から見た空堀跡（北東より、右側）



北西斜面より本丸を見上げる（北西より）



空堀跡（北より）



空堀跡（南より）



南斜面より本丸を見上げる（南より）



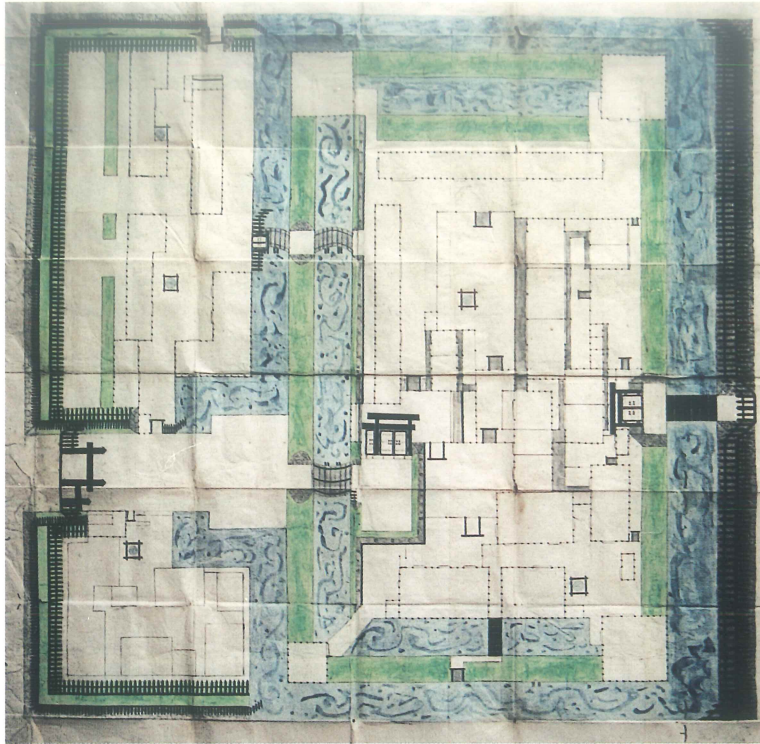
北東尾根筋の堀切地形（東より）



堂山山頂より国分寺盆地を望む



堂山山頂より高松平野を望む



「福家根城之圖量」(上が北)



「福家要害城圖量」(上が北)

報 告 書 抄 録

ふりがな	どうやまじょうせきしゅようぶ ちけいそくりょうちょうさ ほうこくしょ							
書名	堂山城跡主要部地形測量調査報告書							
副書名	平成 16 年度国庫補助事業報告書							
巻次	シリーズ名	シリーズ番号						
編著者名	秋山 忠 末澤直樹 黒田真由美 堀 純子							
編集機関	国分寺町教育委員会							
所在地	〒769-0192 香川県綾歌郡国分寺町新居 1298 番地 TEL(087)874-1527							
発行年月日	平成 17 年 3 月 25 日							
頁数	例言・目次等	本文	図版	総頁				
	4 頁	17 頁	10 頁	31 頁				
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町名	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
どうやまじょうせき 堂山城跡	国分寺町 福家乙 121 乙 122 乙 123-1 乙 125-1 高松市中間町 1576-1	37383		34° 16′ 59″	133° 58′ 42″	2004.7.20～ 2005.1.31	15000	遺跡分布 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		特記事項			
堂山城跡	山城	室町～戦国末	郭 堀切 空堀 土塁					

堂山城跡主要部地形測量調査報告書

平成16年度 国庫補助事業報告書

平成17年3月

編集・発行 国分寺町教育委員会

香川県綾歌郡国分寺町新居1298番地

電話 (087) 874-1527

印刷 (株)ちば印刷

香川県高松市檀紙町471番地1

電話 (087) 886-0218